

論文

19世紀におけるイギリスのジャーナリスト教育

— 高級な文士と働く記者 —

河崎吉紀[†]

要約：19世紀のイギリスでは、ジャーナリストは職業としてあいまいであり、主として高級なジャーナリストとレポーターに分かれていた。前者は学識ある人々に知的なコラムを提供し、後者はゴシップやニュースを集める下層階級であった。新聞社の規模が拡大し、ジャーナリストに需要が生じると、参入者が増え組織化の機運が生まれた。1884年に誕生したジャーナリスト連合は資格を定め、取材の技能を中心に専門職として確立することを目指した。そこでは「記述的」に書くことが求められ、意見よりニュースが優先される。しかし、教養を重視する高級なジャーナリストは自由放任を主張し、レポーターは労働条件や賃金の改善を先に求めた。後者は1907年、ジャーナリスト組合を結成し、自らを労働ジャーナリストと位置づけるようになる。

キーワード：専門職、労働組合、英国、ジャーナリスト協会、ジャーナリスト組合

はじめに

日本には「記者」という便利な言葉があり、職種の違いを意識させない。19世紀末にあった「探訪者」や「種取り」はレポーターに相当し、ニュースを集める役割を果たしていた。「記者」は書く人、すなわちライターを意味した。こうした区別は20世紀初めに失われ、サブエディター（整理担当者）やエディターをはじめ、多様な職種が1つの言葉に託されるようになった。しかし、ジャーナリズムという活動の担い手を一義的に想定するのは危険であり、多様性をもつ幅として捉えたほうが実際に即している。

19世紀のイギリスも、あいまいな職業を定義する難しさを体験した。印紙税法が廃止され価格の下がった新聞は読者層を広げ、新聞社の規模を拡大した。ジャーナリストに対する需要も高まり、参入者が増えて組織化の機運が生まれた。組織に参加できるのはだれなのかという資格を問う議論は、ジャーナリストに必要な能力、そして、それを養う教育と密接な結びつきをもっている。本稿はあいまいな職業を確立させる試みとして、19世紀におけるイギリスのジャーナリスト教育を取り上げる。専門職（profession）とは異なる側面を強調することで、ジャーナリストという職業の認識に新たな一面をつ

[†]同志社大学社会学部准教授

*2010年9月30日受付、2010年10月27日掲載決定

け加えることを目指す。

イギリスのジャーナリスト教育を紹介した日本の文献は乏しい。数少ない先行研究の一つに長谷川進一「イギリスのジャーナリスト訓練制度」がある⁽¹⁾。1960年代のジャーナリスト訓練協議会（National Council for the Training of Journalists）について説明したもので、採用後の訓練と徒弟制を組み合わせる方式を、イギリス独自の制度と位置づけている。また、門奈直樹「最近イギリス・マスコミ事情3——マスコミ・ジャーナリズム教育の現状」は、1980年代を中心に、ジャーナリストの知的レベルを教育修了資格において整理したうえで、レスター大学やカーディフ大学、ロンドン印刷カレッジ（London College of Printing）のカリキュラムを詳細に報告する⁽²⁾。加えて、19世紀にドーチェスターやクルーといった地方でジャーナリスト教育が芽生えた理由として、識字能力、印刷技術の向上にともなう地方工業都市への新たな読者層の集中と、それにつれて生じたジャーナリストの需要増を指摘している。

また、19世紀については、ジャーナリストの就職を扱った森本真美「職業としてのジャーナリズム——世紀転換期イギリスの少年雑誌にみる助言から」が重要な研究である⁽³⁾。出版業界が規模を拡大し、一方で初等教育が整備され、労働者階級の若者が出版物の消費者になると、少年を対象とした雑誌『ボーイズオウンペーパー』にも、ジャーナリストが職業として紹介されるようになった。そこでは、厳しい徒弟修行における貧しさ、出世を重ねて編集長になる華やかな職業イメージの両義性が描かれていた。

このように、1960年代の業界を中心とした訓練や、1980年代の大学、ポリテクニクのカリキュラムはすでに紹介されており、また、19世紀の雑誌において、ジャーナリストに対する職業イメージも明らかにされてきた。とはいえ、高等教育におけるジャーナリズム教育の成立過程や、業界団体との関係、資格化の試みなど、いまだ日英の国際比較に供されていない部分も多い。本稿ではまず、次節においてイギリス初期のジャーナリスト学校を取り上げ、続いて就職活動に言及しつつ、業界団体における資格化の試みを明らかにする。最後に、下層に位置するジャーナリストの組織化に焦点を合わせ、専門職の確立を目指すジャーナリスト教育を相対化したい。

1 初期のジャーナリスト学校

ジャーナリスト学校の試みは1877年にさかのぼる。イングランド北西部の街、クルーで『ウォリントンガーディアン』を経営するアレクサンダー・マッキー（Alexander Mackie）が、新聞社で働きたいという紳士に6か月の訓練をほどこそうと考えた⁽⁴⁾。原稿を割り当てるスペースの判断や、印刷工にわかりやすく訂正を指示する方法、ピットマンの速記法、整理についてなど、ジャーナリストを養成する速成コースを提案した。

また、簿記などビジネス面にも重点が置かれた。レポーター、校正係、整理担当者は互いの仕事を知らない。校正係は植字について無知なため、思慮の足りない修正を増やしている。マッキーには長い徒弟の経験があった。最低限であっても、広く各部署を見渡すような訓練が必要である。それは若いレポーターの役に立つ。設立趣意書には以下の内容が記された。

- 1 植字について、あらゆる種類の活字の名前を知るために、必要な場合、活字をセットでき、印刷工の職長にわかりやすい指示を与え、原稿がどれほどのスペースを占めるのか、活字に直すとどれほどの長さになるのかを計算すること。
- 2 校正、句読点を打たせ、そうでなければ自分の校正刷りか、他人のものを正しく直させ、利害関係をもつ職工のめんどうごとを最小限にする。
- 3 報道について、どのような熱心な学生にもレポーターの務めのすべてをマスターさせられるよう、ピットマンの速記法を教え、社内や会合でそれを練習する機会を与える。読みやすく句読点が打たれ、整理担当者、植字工、校正係のだれをも煩わせることなく、印刷に適した原稿、あるいは技術的な用語で「コピー」を準備することに大いに注意を払わせる。大きな編集室では良い「コピー」と悪い「コピー」の区別は計り知れない。
- 4 整理について、良きコピーを確保し、それを魅力的な形にして提供するという最良の手段を含め、学生が整理の正しい知識を得るようにする。
- 5 簿記について、新聞社の簿記が不完全ではないように、とりわけ1週間の正確な損益を視野に入れ、新聞経営者、あるいは管理職が帳簿のすべてを管理できるように指導する⁽⁵⁾。

6か月のあと、さらに6か月、経験を積むことが期待された。キャリアの出発点でこのような訓練を受けることは、続く6年分の経験にも匹敵するという評価も聞かれたが、この試みは十分な志願者を集めることができず、結局、実施されなかった。

それから10年がたち、1887年に『デイリーテレグラフ』で政治記者、論説委員を勤めたデイビッド・アンダーソン (David Anderson) が、フリートストリートの外れにロンドンジャーナリズム学校 (London School of Journalism) を設立する⁽⁶⁾。ジャーナリズムの訓練をほどこすイングランドで最初の学校となった。コースは12か月で、授業料は年100ギニーと高額だった。学生に記事を書かせ添削するほかは、英国史や憲法、国際法、政治経済といった一般教養を教えるだけで、アンダーソンは速記や整理など実学を軽視した。

のちに小説家となるロバート・スマイス・ヒチンズ (Robert Smythe Hichens) がこの

学校に通っていた。1864年、タンブリッジウェルズに近いケント州の村、スベルドハーストで牧師の家に生まれたヒチンズは、音楽が好きで、父に許しを請い、オックスフォードへ進学する代わりにロンドンの王立音楽アカデミーに入学した。しかし、ほかの学生の才能に圧倒され、限界を感じて音楽への道を断念してしまう。彼は文筆家になる希望を父に語り、紹介されたのがロンドンジャーナリズム学校だった。

建物の2階に2つ部屋があって、最初の大きな部屋は生徒たちが使った。テーブルにはインク壺、吸い取り紙、原稿用紙、辞書や参考書などが雑然と置かれていたという。数人の生徒が窓の近くに立ったまま話をしており、ペンを持って作業をしている者は2、3人にすぎなかった。アンダーソンの部屋は奥まったところにあり、生徒たちから「デイビッドの聖域（書齋）」と呼ばれていた⁽⁷⁾。教育方針について、ヒチンズは次のように告げられる。

「ヒチンズ君、君はまったくの自由なのだ。君を煩わせるようなことは一切しない。毎日、その部屋を自由に使ってよろしい」と、彼は優雅にドアを指さした。「そこで作業をしてもよいし、そうしたいなら、ほかの生徒たち同様、まったくなにもしなくてよい」⁽⁸⁾。

インクは用意するので、原稿用紙を持参し、書いたものはいつでも添削する。アンダーソンは毎日、部屋にこもり、頼まなければ知識を分け与えなかった。たとえ生徒たちが彼の元を立ち去っても、日がな一日、書齋で穏やかに過ごせるような人であるとヒチンズは描いている⁽⁹⁾。

ヒチンズは毎日、時間どおりに学校へ通い、速記を勉強し、アンダーソンに勧められて公的なイベントを見て回った。そして、記事や劇評を投稿した。ときには庶民院や貴族院を傍聴して、夕刊紙へ送る原稿を書くこともあった。アンダーソンの自由放任主義に対して、生徒たちの評判は芳しくなかったという。結局、彼は学校を閉じることになり、古巣の『デイリー・テレグラフ』に戻ってしまう。一方、ヒチンズはロンドンジャーナリズム学校を1年で終え、その後は大英博物館の読書室に通った。寄稿によって生計を維持し、小説を書いたのちに認められるようになる。

また、ジャーナリズムに関連して今日まで続く学校に、ロンドンコミュニケーションカレッジ (London College of Communication) がある。1883年、シティ教区チャリティー法によってセントブライド財団が設立され、1894年11月に印刷学校を開いた。夜間のクラスに124人が参加した。1922年にロンドン印刷関連学校 (London School of Printing and Kindred Trades) と改称し、1962年、ロンドン印刷カレッジ (London College of Printing) となった。エレファントアンドカッスルに本拠を置き、2004年に改称して現

在に至る⁽¹⁰⁾。

このように、19世紀後半に散見されるジャーナリスト学校は、いまだ体系的に整備されたものではない。マッキーの構想は速記や印刷、簿記など実学を重視したものであり、アンダーソンのロンドンジャーナリズム学校は教養を重んじた自由放任主義によって運営されていた。また、今でこそ「コミュニケーション」を冠するカレッジも、出発点は印刷学校にあった。こうしたあいまいさは、ジャーナリストに対する職業観にも反映される。19世紀末の少年誌『ボーイズオウンペーパー』で描かれたジャーナリストについて、森本真美は次のように記している。

軍人、植民地官僚、電信技師や機関士——彼らが憧れた職業は、テクノロジーの発達や帝国主義といった時代の色彩を如実に反映する写し鏡にほかならないが、チャーティストの記憶とともに、悪しきラディカリズムという負のイメージをもその陰に併せ持っていたジャーナリストという職業が、この華やかなリストに加わり始めたことには注目されるべきであろう⁽¹¹⁾。

その反面、無給の徒弟期間を辛抱し、年季が明けても事務員と変わらない給料で働く地道な側面も雑誌のなかに描かれる⁽¹²⁾。次節ではこうした「ジャーナリスト」の多様性を、文学との結びつきにおいて見てみよう。

2 あいまいな「ジャーナリスト」

アーサー・シャドウェル (Arthur Shadwell) が1898年、『ナショナルレビュー』に書いた「専門職としてのジャーナリズム」によれば、「ジャーナリズムはいまだ非常に漠然とした専門職であり、寄せ集めである」と記されている⁽¹³⁾。目下、新聞社の拡大による雇用の増大がジャーナリズムの専門職化を進めており、教養ある浮浪者から育ちの良い人々へとジャーナリストは移行している。それは「紳士のキャリア」であると彼は語る。ジャーナリストはほかの職業を試みた後、流れてきた者たちであり、その過程こそがジャーナリストを淘汰する試験であると考えた。ジャーナリスト学校については、レポーターや整理担当者を養成できても、編集長や主筆を育てることはできないとしている。

ビクトリア時代のジャーナリストは、高級なジャーナリストとレポーターに分かれていた。高級なジャーナリストは知的なコラムを寄稿し、学識ある人々に意見を提供する。レポーターは事件を担当しゴシップを執筆した。後者は下層階級とみなされ、両者の区別が間違えられることはなかったという⁽¹⁴⁾。「専業ジャーナリストの評判は低かつ

た」と指摘されるが⁽¹⁵⁾、高級なジャーナリストは文士も含め、寄稿家であり専業ではなかった。

では、前者はどのようにして生まれるのだろうか。上述した小説家、ヒチンズは学校に通ったが、異なる事例として、ここでは『ピーターパン』を書いた劇作家、ジェームズ・マシュー・バリ（James Matthew Barrie）を取り上げよう。

バリは1883年、イングランドの『ノッティンガムジャーナル』に論説記者として入社している。姉のジェーン・アンが求人広告を見つけ、応募することになった。

その求人広告を見て、はっとした。論説記事は、いつも飛ばして読んでいたからだ。論説とは！ どのように書けばいいのだろうか？……考えてもむだだと思ったそのとき、母が日刊新聞を持ってきた。どの記事が論説なのかとたずねてきたので、母も論説のことは何も知らないらしい。ほかに新聞はある？ とわたしがたずねると、母は家中を探しまわって、衣装箱の中じきにしていたものをいくつか見つけだしてきた。カーペットの下からも、ほこりをかぶった新聞が出てきて、すすけた新聞の束まで煙突から引きずりおろされた。それらの新聞にかこまれてわたしはすわり、新聞記者になる方法を研究した⁽¹⁶⁾。

彼は大学時代に書いたリア王に関する論文を送り、新聞社に採用された。その後、作家への転身を図り、ロンドンの新聞社、雑誌社へ投稿を続け、1885年、上京してロンドンで投稿生活を始める。

このように、メディア業界への就職活動に投稿という手段があった。それは「ふつうの若者が生涯、作文を送り続けたとしても、思いやりのある編集長が編集室の席に彼らを招くことはないだろう」と記されるように、容易な道ではなかった⁽¹⁷⁾。また、ジャーナリストと小説家の境界もあいまいだった。ロンドンで文筆活動を行う者が集まる有名な通りにグラブストリート（Grub Street）があり、彼らは三文文士と呼ばれたが、ジャーナリズムと文学、ノンフィクションとフィクションの区別はなく、ニュースを扱おうが創作を試みようが「ジャーナリスト」という言葉でくくられることが多かった⁽¹⁸⁾。1895年に『ジャーナリストになる方法』を書いたアーネスト・フィリップス（Ernest Phillips）は「プレスで報道することが専門職とみなされるようになったのは、ほんの数年前にすぎない」と記している⁽¹⁹⁾。19世紀におけるジャーナリズムはあいまいな職業であり、専門職を求めるといった動きはなにより、こうしたあいまいさに対する決別を意味した。それはジャーナリストの組織化となって具体化する。

3 ジャーナリスト協会の入会試験

1881年頃から、マンチェスタープレスクラブの会員が中心となり、同僚や家族のための慈善基金が話し合われるようになった。1883年7月、ヨークで開かれた農業展示会に集まった北イングランドのプレスマンたちが、生活の貧しさを語り合うなか、自らを代表する組織を立ち上げようと動き出した。1884年10月、バーミンガムのグランドホテルでジャーナリスト連合（National Association of Journalists）が結成される。会員の幅を広げようと、1886年3月、最初の会合はロンドンのフリートストリートで開催された。有給の職員を雇い、機関誌を発行することを決め、会長に『モーニングポスト』経営者のアルジャーノン・ボスウィック卿（Algernon Borthwick）を選んだ。本部はフリートストリート78番地にすえられた。

ジャーナリスト連合はさっそく1887年から翌年に向け、入会試験の導入を検討している。試験の内容は次のようである。

- 1 志願者は英文学と一般的な知識において口頭試問を受ける
- 2 話を2, 3の活字にまとめる
- 3 与えられたテーマについて小論文を書く
- 4 試験官によって語られた3つのできごとから文章を作る
- 5 間違いのある24の文章を直す
- 6 バランスシートを要約する
- 7 速記のテスト
- 8 記述的（descriptive）に書くテスト
- 9 言語の文法構造を志願者にテストする⁽²⁰⁾

8の「記述的に書くテスト」には賛否両論があった。1880年代以降、「ニュージャーナリズム」という言葉が登場する。これは主張を行わず、事実のみを伝えようとする姿勢、つまり、高級なジャーナリストが扱う政治評論や文芸とは一線を画し、ニュースを重視する方向性を表していた。逆に一言一句を機械的に記すだけの作業として見下されてもいた。

アルフレッド・アーサー・リード（Alfred Arthur Reade）は『文筆における成功』で、数名のジャーナリストを登場させ、レポーターに必要なものはなにかを問うている⁽²¹⁾。『スタンダード』の編集長、ウィリアム・ヘーゼルタイン・マッドフォード（William Heselton Mudford）にとって、議会報道に必要なのは機械的な技能ではなかった。政治に

ついで最新の知識、政治史への学識が大切である。また、たたき上げでキャリアを築いたウィームズ・リード (Wemyss Reid) は「私が知っている最悪のレポーターは見事な速記者であった」と述べ、知性や表現の才能こそが必要であり、鉛筆を扱う器用さだけでは良きレポーターになれないと語っている。むしろ、現代史や英文学を学び、話し手の言い回しや風刺を理解できるようにすべきである。『リバプールデイリーポスト』の編集長、エドワード・リチャード・ラッセル (Edward Richard Russell) も、レポーターの最良の資格を知性に求め、若い人たちは速記を身につけることが重要だと信じているが、それだけを追求するのは誤りであるという。

このようにリードは、当時のジャーナリストが速記を駆使した逐語的な報道に懐疑的であったことを示した。正確さや客観性をジャーナリズムに求めるのは比較的新しい事態である。19世紀なかばより安価なプレスが広まり、フレッド・ハンター (Fred Hunter) によれば1837年から1887年にかけて地方紙の競争が激化したという⁽²²⁾。これによりジャーナリストの不足は悩みの種となり、育成の問題が地方紙に突きつけられた。当初、ジャーナリスト連合は試験の導入に否定的であったが、経営者を会員に含むことによって考えが変化した。はっきりと正確に英語を書く能力、すなわち「記述的」に書くことを求めるようになったのである。

ジャーナリスト連合は1889年にジャーナリスト協会 (Institute of Journalists) となり、1890年、ビクトリア女王から勅許を受けた。「そうすることで、ジャーナリズムの仕事に就いている人々の地位を改善し、同時に、エンジニア、建築家、会計士が享受しているような専門職の地位を彼らに授けられるだろう」と考えられた⁽²³⁾。ボヘミアンな生活や、ギャンブル、アルコールといった悪習からジャーナリストを救うことが期待された。資格を定め、ジャーナリストの地位を高めることで報酬の改善を図ろうとしたのである。会費は年10シリング6ペンスであった⁽²⁴⁾。

すでに検討を重ねていた入会試験は、1893年、会員と徒弟に課すことが決められた。しかし、実施には移されず棚上げとなる。そこには、あいまいな職業の定義をめぐるヘゲモニーの争いがあった。ジャーナリスト協会の幹部は幅広く会員を募る予定であり、試験についても専門性を問うつもりはあまりなかった。むしろ、人だけが通って牛馬は通れない「回転木戸」というレトリックが使われ、教養ある人々のみを参入させようとした。ジャーナリストは政治家、小説家、社会慈善家になるための腰掛けと考えられており、「専門職」を標榜しながら開放性を求めるという矛盾があった⁽²⁵⁾。結局、試験の構想では「記述的」に書くといった実学的要素が後退し、ラテン語や歴史、英文学、数学が問われることになる。これらは10代でジャーナリズムの世界に入る少年にとって学びようもない科目であり、ユークリッドの知識を現場で使うことなど一度もないとレポーターからは批判の声が上がっていた⁽²⁶⁾。

4 労働ジャーナリストの誕生

ジャーナリズムに参入の開放性を主張する考えは、学識ある専門職（learned profession）を下敷きにしており、これは社会的地位に基づいていた。主筆や編集長にはオックスブリッジ出身者が数多くいた。彼らのなかには落選した政治家、零細企業の社長が含まれ、政党から支援を受けて編集長を務めることもあった。情報を伝えるだけのレポーターとは役割が異なったのである。ジャーナリストの訓練についても次のように考えられた。

より広い教育、完成した知的素養、より良いのは「ジャーナリズムの学校」であるように思う。（中略）しかし、私は言わねばならない。先天的なものとは後天的なものを判断して、ジャーナリズムの最良の学校はオックスフォード大学であり、海外への遊学であると⁽²⁷⁾。

高級なジャーナリストは、ジャーナリズムを「開かれた」職業と捉えていた。そこでは、医者や弁護士とは異なり、専門的な知識や技能を問うことはない。したがって、知識や技能で身を固め、その希少性ゆえに社会的地位が高まり、ひいては報酬を増やすことにもつながるといふ専門職化は、財産も教養もある高級なジャーナリストからみて本末転倒な話であった⁽²⁸⁾。彼らの考えは、ジャーナリストは生まれる者であって作られる者ではないという信念に合致する。試験によって資格を明確にするという提案にも否定的であった。

一方、レポーターや整理担当者など下層に位置するジャーナリストからみても、ジャーナリズムは「開かれた」職業であった。多くの人々がほかの業界から流れてくる。あらゆるところから、人材はでたらめなやり方で採用されていた。使い走りでも能力があればジャーナリストに転身できた。彼らは「プレスの紳士」を気取り、プライドは高かったが貧しい人々であった⁽²⁹⁾。そして、この異常に高いプライドが、職業に対する忠誠心を焚きつけ、経営者だけを儲けさせるような劣悪な環境においても、仕事を進んで引き受けさせることになる。しかし、新聞社の経営に変化が生じ、古い家族経営が消滅していくと、ジャーナリズムは専門職（profession）ではなく単なる職業（trade）であると考えた人々が現れた。

試験によってジャーナリストの知識、技能、倫理を高め、酒やギャンブルにまみれた墮落したイメージを払拭し、専門職の地位を確立すれば報酬もそれにともなって向上する、といったような悠長なことを彼らは言うていられなかった。19世紀の後半に入る

と、破天荒なジャーナリストの生活も徐々に影を潜め、スクープを獲得する競争に没頭するようになる。それでも十分な報酬は得られていない⁽³⁰⁾。財産があるから教養もあり、したがって地位が高いのであって、地位を上げれば財産や教養が手に入るという論理は、底辺に働くジャーナリストにとって珍妙に思えたのである。

1889年10月にジャーナリスト協会で初めて会合が開かれたとき、会員は約1,600人であった。1892年には3,114人へと倍増し⁽³¹⁾、1894年までに会員は3,556人を数えていた⁽³²⁾。ジャーナリスト協会が発足しても、現場で働くジャーナリストの待遇は改善されなかった。機関誌のタイトルが『ジャーナリストと新聞経営者』であったことに象徴されるように、会員には新聞社の幹部や経営者が含まれており、数のうえでは少なかったが大きな影響力をもっていた。彼らは闘争的な組合主義に否定的だった⁽³³⁾。ジャーナリスト協会の活動は上層部の社交に終始しており、実効性のある事業がなされていないとの批判があった。

地位が報酬を導くという専門職モデルに幻滅したジャーナリストは、若手を中心に1907年11月、マンチェスターでジャーナリスト組合(National Union of Journalists)を結成した。目的は労働条件と賃金の改善であった。フレデリック・ジョン・マンズフィールド(Frederick John Mansfield)は組合結成について、「上品に言えば専門職だが、下働き以上の生活ではなく、しばしばそれ以下でもある従業員を多く抱える手仕事や工芸に属する労働者への、組合を結成しようという呼びかけにほかならない」と記している⁽³⁴⁾。

そもそも、ジャーナリストの経済的な成功は、個人的な成果とみなされており、労働条件や賃金に決まりはなかった。貧困にあえぐジャーナリストは助け合いによって苦境を乗り切った。組合を作ろうという呼びかけに対し、障害となったのはジャーナリストたちの意識だった。自らの地位について、華やかだが中身の無い主張が先行していた。機械的で凡庸な生産者として、固定された給与水準をもつことへの反発である⁽³⁵⁾。ひどい低賃金は週刊紙のみならず、日刊紙のジャーナリストにおいても見られた。実態は悲惨であった。徒弟がスタッフの大きな割合を占め、シニアでも立場は不安定、競争から低賃金に甘んじ、それがまた報酬の水準を下げるという悪循環を生んでいた。労働時間は超過勤務が多く余暇はほとんどなかった。さらに、ジャーナリズム活動とはいえない雑務まで引き受けさせられることがあった。

すでに1864年、貧困に陥ったジャーナリストやその未亡人に対し、新聞プレス基金が立ち上げられたこともあり、1873年までに100人以上のジャーナリストに2,282ポンドが支払われている。だが、こうした試みは組合として待遇の改善を要求するものではなく、慈善事業に位置づけられるものであった⁽³⁶⁾。こうしたなか、ジャーナリスト協会からジャーナリスト組合が分裂し、試験や資格化といったジャーナリスト協会の試みは頓挫する。マーク・ハンプトン(Mark Hampton)は「排他的な専門職を作ること

への協会の失敗は、専門職という観念の消滅と、労働組合という観念の成長に帰する」としている⁽³⁷⁾。イギリスでは「労働ジャーナリスト (working journalist)」という言葉が実態を反映するものとして採用された。彼らは週に 30 シリングかそこの賃金で「みすばらしくペンをふるう者たち」であり、「やせこけた文士」であった⁽³⁸⁾。

おわりに

1902 年から 1905 年にかけて、プレス貴族のひとり、ノースクリフ卿 (Northcliffe) はシティ・オブ・ロンドンスクール (City of London School) へ G・W・スティーブンス記念ジャーナリズム奨学金として 3,000 ポンドを寄付した。その考えは、学生に海外で見聞を広めさせるというもので、一般教養を重視するパブリックスクールの方針に則っていた⁽³⁹⁾。また、1908 年 8 月、アルフレッド・ロビンス卿 (Alfred Robbins) がジャーナリスト協会で行った講演では、ジャーナリストは知的な職業とされ、敬意を抱かれる存在でなければ良い記事は書けない、三文文士がその職業を代表するならプレスは頹廃してしまうと語られた⁽⁴⁰⁾。

20 世紀に入り、高級なジャーナリストが抱く学識ある「開かれた」職業の方向性は、学校教育との結びつきを模索し始めた。ジョン・チャートン・コリンズ (John Churton Collins) は、古典的なカレッジで良質の学位を取得した若者は、新聞社で 1 年も経験を積み使えるようになると思った⁽⁴¹⁾。彼らはさらに議会へとキャリアを進めることもできるだろう。オックスフォードのベイリオル学寮で学ぶということは、政治経済や歴史、芸術の講義を聴き、博物館を訪ね、学者たちと散歩することを意味する。大学やカレッジのクラブ、公的なイベントはジャーナリズムの訓練につながるという。

さらにコリンズは、社会が古い大学に求めるものを払拭し、新聞社で身につけるものを先取りしてもよいのではないかと考え、ディプロマによってジャーナリストの資格を証明する案を披露している。英国の編集長は新人の訓練を疎ましく思っている。ジャーナリズムに進む大卒も年々増えてきた。ただし、こうした訓練をオックスフォードやケンブリッジで行うことは難しい。なぜなら、これらの大学は学術的な指導を受ける場所だからである。ジャーナリストの教育はロンドン大学、あるいはバーミンガム大学などが担当すべきであるとした。

ハンターによれば「1908 年までに、バーミンガム大学はジャーナリズムに関するイングランドで初めてのシラバスを公表していた」という⁽⁴²⁾。コリンズは 1904 年からバーミンガム大学で英文学を教えていた。公表されたカリキュラムとは、彼が提案したジャーナリズムに関する 1 年制の大学院コースである。政治哲学や英国史、英文学、外国語など一般教養と「ジャーナリズムの技術に関する特別な訓練」として記述的な記事の

執筆，社説の執筆，速記，実践的な指導を盛り込んでいた。しかし，大学は一般教養のカリキュラムしか認めなかった。計画は承認され委員会が設置されたが，コリンズの死により実施にはいたらなかったという。

一方，ジャーナリスト協会が目指した知識や技能による専門職の方向性は，一般教養を重視する声も含めつつ，1900年に開かれたロンドンにおける会合で再び取り上げられ，もはや延期すべきではないとの合意に達していた⁽⁴³⁾。試験実施は1902年1月と決まった。ところが，計画は何度も変更を余儀なくされ，再度，開始日を1908年1月に設定しなおしている。このとき，試験は徒弟準会員のみにも適用され，学校による試験に合格，あるいは学位を取得している者は免除されることになった。また，1907年から翌年にかけて，リーズ地区ではジャーナリストを訓練するための講義が行われ，1908年9月には，マンチェスターでジャーナリスト教育についての会議が催されている⁽⁴⁴⁾。結局，試験は1913年まで振り返られることなく頓挫したままであった。

また，レポーターや整理担当者など第一線で働くジャーナリストは，世紀が変わっても「工学士より機械工」と自らをみなすことを好んだ⁽⁴⁵⁾。高い倫理水準を保ち，知識や技術で地位の向上を目指す専門職を求めることはなかった。発行部数の増加によって，ジャーナリズムが産業として大きくなると，新聞社は企業としてビジネスという側面が強調され，なかにはプレス貴族が生まれた。ジャーナリストと経営者の距離はますます広がり，高級なジャーナリストがもつ教養に裏打ちされた「開かれた」専門職という考えは，知識や技能を身につけ資格化を目指す「閉ざされた」専門職を突きつけられることになった。一方で，薄給に耐えながらも，自らを冒険家に見立てるようなグラブストロートの三文文士も，ジャーナリストが労働組合を結成するなかで，立場を見直さざるを得なかったのである。

注

- (1) 長谷川進一「イギリスのジャーナリスト訓練制度」『新聞研究』159号，1964年。
- (2) 門奈直樹「最近イギリス・マスコミ事情3—マスコミ・ジャーナリズム教育の現状」『総合ジャーナリズム研究』23巻2号，1986年。
- (3) 森本真美「職業としてのジャーナリズム—世紀転換期イギリスの少年雑誌にみる助言から」『神戸市外国語大学外国学研究』53号，2001年。
- (4) Lee, Alan J., 1977, "Early Schools of Journalism Training: From 1878-1900," *Journalism Studies Review*, 1 (2): 35-6.
- (5) Reade, Alfred Arthur, 1885, *Literary Success: Being a Guide to Practical Journalism*, London: Wyman, 9-10.
- (6) Waller, Philip, 2006, *Writers, Readers, and Reputations: Literary Life in Britain 1870-1918*, Oxford: Oxford University Press, 399-400.
- (7) Hichens, Robert Smythe, 1947, *Yesterday*, London: Cassell & Co, 44-5.
- (8) *Ibid.*, 46.
- (9) *Ibid.*, 48.

- (10) University of the Arts London, 2010, "History of LCC" (http://www.lcc.arts.ac.uk/lcc_history.htm, July 8, 2010).
- (11) 森本真美, 2001 年, 前掲書, 129 頁。
- (12) 同書, 138 頁。
- (13) Shadwell, Arthur, 1898, "Journalism as a Profession," *National Review*, 31 : 845.
- (14) Hunter, Fred, 1982, *Grub Street and Academia : The Relationship between Journalism and Education, 1880–1940, with Special Reference to the London University Diploma for Journalism, 1919–1939*, London : City University PhD thesis, 28–30.
- (15) Carr-Saunders, Alexander Morris and Paul Alexander Wilson, 1933, *The Professions*, London : F. Cass, 266.
- (16) スーザン・ビビン・アラウ (奥田実紀訳) 『ピーター・パンがかけた魔法-J・M・バリ』文溪堂, 2005 年, 40–2 頁。
- (17) Phillips, Ernest, 1895, *How to Become a Journalist : A Practical Guide for Newspaper Work*, London : Sampson Low, Marston and Company, 4.
- (18) Hampton, Mark, 2005, "Defining Journalists in Late-Nineteenth Century Britain Preview," *Critical Studies in Media Communication*, 22(2) : 140–1.
- (19) Phillips, 1895, *op. cit.*, 1.
- (20) Hunter, 1982, *op. cit.*, 407.
- (21) Reade, 1885, *op. cit.*, 1–4.
- (22) Hunter, 1982, *op. cit.*, 32.
- (23) Hunter, Fred, 1993, "Institute of Journalists," George Anthony Cevasco ed., *The 1890s : An Encyclopedia of British Literature, Art, and Culture*, New York : Garland, 306.
- (24) Hampton, Mark, 1999, "Journalists and the Professional Ideal in Britain : The Institute of Journalists, 1884–1907," *Historical Research*, 72(178) : 186.
- (25) *Ibid.*, 189–190.
- (26) Hunter, 1982, *op. cit.*, 131.
- (27) Shadwell, 1898, *op. cit.*, 847.
- (28) Hampton, 1999, *op. cit.*, 193.
- (29) Mansfield, Frederick John, 1943, "Gentlemen the Press!" *Chronicles of a Crusade : Official History of the National Union of Journalists*, London : W. H. Allen, 16.
- (30) Hampton, 2005, *op. cit.*, 148.
- (31) Hunter, 1993, *op. cit.*, 307.
- (32) Hampton, 1999, *op. cit.*, 186.
- (33) Bainbridge, Cyril, "History of the CIOJ" (<http://cioj.co.uk>, July 17, 2009).
- (34) Mansfield, 1943, *op. cit.*, 13.
- (35) *Ibid.*, 17.
- (36) Hampton, 1999, *op. cit.*, 186.
- (37) *Ibid.*, 195.
- (38) Mansfield, 1943, *op. cit.*, 13.
- (39) Hunter, 1982, *op. cit.*, 111.
- (40) *Ibid.*, 118–9.
- (41) Collins, John Churton, 1908, "The Universities and Journalism," *Nineteenth Century*, 63 : 333–7.
- (42) Hunter, 1982, *op. cit.*, 74.
- (43) Line, E. J., 1916, "Institute History : How the Organisation Grew into Its Present Form," *The Institute Journal : The Official Organ of the Institute of Journalists*, 4(3) : 60.
- (44) Hunter, 1982, *op. cit.*, 147–8.
- (45) Delano, Anthony, 2000, "No Sign of a Better Job : 100 Years of British Journalism," *Journalism Studies*, 1 (2) : 268.

Journalism Education in Nineteenth-Century England : Higher Writers and Working Journalists

Yoshinori Kawasaki

The definition of journalists in nineteenth-century England was rather ambiguous. They were roughly divided into two categories : writers and reporters. The former contributed articles targeted at intellectuals, while the latter wrote gossip columns and covered events for the masses. Triggered by the growth of the newspaper industry, when the demand for journalists rose, there was a need for the establishment of a professional organization for journalists. Consequently, the National Association of Journalists, established in 1884, sought the status of journalism as a profession. It focused on compilation of news rather than personal opinions of journalists, and emphasized descriptive writing skills. However, writers in higher positions continued following the laissez-faire approach, while low-ranking reporters were considered as working journalists after the inception of the National Union of Journalists in 1907.

Key words : profession, trade union, Britain, Institute of Journalists, National Union of Journalists